

投稿論文

大阪暁明館と関西学院学生奉仕団

—カール・秋谷一郎の役割を中心として—

小笠原 慶彰

京都光華女子大学キャリア形成学部

● 要約 ●

大阪暁明館は、大正初期の大阪で篤志家によって創設された社会事業施設であったが、昭和初期に関西学院学生奉仕団に経営移管されてからセトルメント化した。現在も地域の基幹病院として存続している。この関西学院学生奉仕団は、関西学院に在学していた婦米二世のカール・秋谷一郎が創設した団体であった。しかし秋谷は奉仕団が暁明館の経営に乗り出す直前に米国に帰国し、そのまま日本国籍を放棄して学院を中退し、戦中・戦後期を米国民として生きた。昭和初期には大学セトルメント運動の先鋭化や学生キリスト教運動、社会的キリスト教運動があり、それらに関わる学生には左傾学生というレッテルが貼られることもあった。秋谷は積極的にこれらに関わったのではないが、キリスト教社会主義の立場を取りつつあった。そういう事情から、学院当局は秋谷とは違った路線でのセトルメント化を模索し、それが秋谷の帰国と国籍放棄の一因にもなったかもしれないのである。

● Key words : 大阪暁明館, 関西学院学生奉仕団, カール・秋谷一郎, セトルメント, 婦米二世

人間福祉学研究, 6 (1) : 69-89, 2013

1. はじめに

大阪暁明館は、大正初期に大阪で篤志家によって創設された底辺労働者のための宿泊保護施設であった。昭和初期に関西学院学生奉仕団¹⁾に経営移管されてからセトルメントに衣替えして被占領期に至り、その後は現在まで地域の基幹病院として存続している。つまり、慈善事業施設としてスタートし、セトルメントになったものの、昭和戦後期にはそのままの存続は困難となって、病院経営を中心とする事業形態に移行したのである。しかし社会福祉事業法（社会福祉法）のもとで社会福祉法人経営の医療機関として特色を残してきたといえよう。そしてもう一つの特徴は、現在で

も病院内にチャペル（伝道所）が設置されていることである²⁾。これはキリスト教主義学校である関西学院との浅からぬ関わりを彷彿とさせるものとなっている。

だが大阪暁明館の社会福祉史における注目すべきユニークさは、関西学院学生奉仕団によって経営されたセトルメント期、すなわち昭和初期から被占領期までであるように思える。この時期のセトルメント、とりわけ学生セトルメントの多くは、戦時色が濃厚になるにつれて左傾的とみなされ、閉鎖を余儀なくされることが少なくなかった。大阪暁明館も学生セトルメントといえるだろうが、存続しえた理由はその出発点にあったのではないかと思える。

ところが意外なことに、関西学院学生奉仕団が関わりセツルメント化することになった経緯については、奉仕団創設の立役者である、ある人物の評価とともに、案外審らかになっていない。本稿は、その人物、すなわち婦米二世³⁾であるカール・秋谷一郎 (Karl Akiya Ichiroh)⁴⁾を軸に、彼と学生奉仕団および大阪暁明館の関係を考察し、暁明館がセツルメントとして存続し続けられた理由を探ろうとするものである。

2. 先行研究

大阪暁明館についての資料としては、いわゆる年史類⁵⁾は別として、遠山 (1995) がある。これは1986 (昭和61)年に創刊されたコミュニティペーパー『暁明館だより』に「暁明館物語」のタイトルで収録されたコラム46篇をまとめて80周年記念誌として出版されたものである。本書によって、大阪暁明館の歴史について、その周辺事情やこぼれ話も含めて概括的に把握することができる。通史的で便利な読み物的資料だが、特定のテーマを持った研究ではない。

研究対象として大阪暁明館の歴史を扱ったものは多くないが、その成り立ちや関西学院との関係について論じたものとしては、神田 (1992) がある。これは、暁明館創設当時の背景から説き起こし、当時の学生セツルメントの状況、関西学院学生奉仕団との関係、その後の動向について言及しているが、秋谷については、引用資料にその名前が登場するだけである。大阪暁明館と学生奉仕団および秋谷の関係について言及したものとしては、室田 (2012) と小笠原 (2010) がある。前者は、学生奉仕団の創設に秋谷が深く関わっていること、その学生奉仕団が大阪暁明館の経営を担ったこと、そして秋谷の思想に関西学院のスクールモットーが影響していたことに触れている。後者にも同様の簡単な言及があるが、両者とも事実関係の把握が中心で、考察は少ない。

もちろん、これらの資料や先行研究によって、

大阪暁明館と関西学院学生奉仕団の関係について、ある程度把握することはできる。しかし、秋谷の思想や役割、奉仕団が大阪暁明館の経営を担うことになった前後の事情については、それほど明らかになっているとはいえない。既述したように、大阪暁明館が戦時期にセツルメントとして存続しえた理由は、発足時の経緯と関係しているように思える。しかしその点については、いずれも明確にしていないのである。その点を考察する前提として、まず大阪暁明館の略史を振り返っておくことから始めよう。

3. 大阪暁明館について

大阪暁明館は、1915 (大正4)年5月、地元の篤志家、廣岡菊松が当時5000円の私財を投じ、大阪市西区 (1925年・此花区) 四貫島文徳町10番地に開設した。当初は底辺労働者向け宿泊保護施設であった。西区一帯は、明治末から工場が集中し始め、東洋のマンチェスターと称された。とりわけ「西六社」、すなわち住友伸銅所 (住友金属工業)、大阪鉄工所 (日立造船)、住友肥料製造所 (住友化学)、住友電線製造所 (住友電工)、汽車製造 (川崎重工)、大阪瓦斯 (大阪ガス) がその中核であった。つまり、四貫島を含む西区一帯は、労働者街であった。菊松は、1866 (慶應2)年生まれで、勤儉力行して実業家・名望家となった人物であり、社会事業にも乗り出したのである。大阪府方面委員制度最初期の1918 (大正7)年11月から方面常務委員にもなった⁶⁾。その背後には同様の施設として自彊館を開業させた経験のある中村三徳の支援があり、大阪暁明館と名付けたのも彼であった。中村は、1913 (大正2)年に大阪市長となって社会部を創設し、社会事業行政を推進した池上四郎が警察部長だった時、社会事業に取り組んだ有力警察官3人に挙げられている人物である。

さてその暁明館は、全16室に押入れ付、1畳に1人の割で定員80人、食事も工夫されていて、共同で利用する風呂もあった。当時としては衛生的

で先進的設備である。ところが事業が軌道に乗り始めた1919(大正8)年10月15日、菊松が逝去した。嗣子の信貴知は、事業を引き継いだ時点で、関西学院高等学部学生であり、卒業後も阿倍野の明浄高等女学校の英語教師を兼務した。それから十数年が経ち、折から昭和初期の世界的不況の煽りで、運営は困難を極めた。信貴知は、小規模な個人経営に限界を感じ、関西学院高等商業学部長になっていた恩師、神崎驥一に相談した。神崎は、一切を関西学院に託すとする信貴知の申し出を役員会に諮り合意を得た。そして1931(昭和6)年9月、関西学院学生奉仕団大阪暁明館として新たなスタートが切られるのである。

この時のことは、『關西學院新聞』に「奉仕会では四貫島の暁明館を引継に決定す」と題して、以下のように報道されている。

この問題に関して文4、秋谷君を訪えば「経営の具体的問題に関しては各自それぞれ意見を異にして一致を見なかったが兎も角も財政及び人事の関係からして最初は現状維持を続ける事にし、原田・原野・河辺の3教授及びランバス女学院長田中貞氏を常務委員に挙げ専門的方面の調査を依頼することにした。引継は9月に実施する予定である」と語った。(『關西學院新聞』65号、1931.6.20. 3面。)

この記事中に見える「文4、秋谷君」こそが、当時関西学院専門部文学部4年に在学していたカール・秋谷一郎である。秋谷は、米国カリフォルニア出身の日系二世で、この年の夏季休暇中に一時米国に帰国していたが、そのまま「日本に行くことを断念し、関学文学部に中途退学届けを出した」のである(秋谷、1996:140)。つまり彼は関西学院が暁明館の経営を引き継ぐ前段階で重要な役割を担いながら、それが実現する日には日本にいなかったのだ。

ところで記事中に見える「各自それぞれ意見を異にして」とは、どういうことであつたのだろうか

か。それについては秋谷が日本国籍を放棄し関西学院を中退した理由とともに後に考察する。

これ以降の暁明館は、スクールモットー「マスタリー・フォア・サービス“Mastery for Service”」の精神を旨としてセツルメント事業を展開していく。記事中にもあるように、奉仕団は、理事会を構成し、初代理事長に神崎、常任理事は同じく関西学院から河邊満麿教授、理事に上本町のランバス女学院から田中貞院長、元館主廣岡信貴知らが就任、学生奉仕団と一体的に運営された。『關西學院新聞』は、神崎の言として「具象化した暁明館の経営 労働者の宿泊や隣保教育事業を行う」の見出しで「組織は財政問題の責任上奉仕会直接のものとはせずして組織的に密接な関係をもつ別の単位の事業にする予定でいます」としながらも隣保部を設けることを明言している(『關西學院新聞』68号、1931.9.20. 3面)。

その言の通りに事業内容も従来の宿泊保護に加えて、授産、保育、教育、伝道教化と幅を広げていった。授産部では、大阪府受託の紙函製造に対して阪急・大丸等の百貨店から大口発注もあったとされる。とりわけ中古衣料のリサイクルを主要事業としていた。宗教部では、地域の子どものための日曜学校や街頭伝道を展開した。隣保部では、ランバス女学院の学生保母による幼児学園、少年少女倶楽部、夜間公民教室、料理講習会等を実施した。5年後の1936(昭和11)年には、財団法人の認可を受け、西淀川区高見町(現・此花区高見)に新しく隣保館を設けた。これを機に高見町(本館)では、医療保護事業と隣保事業、文徳町(分館)では、宿泊保護事業と隣保事業と役割が分担された。

この時に高見町で実施された低額診療所が戦後の病院経営へと発展していった。1947(昭和22)年に分館を転用して大阪暁明館病院が設立され、この年に社会福祉法人となった。これ以後は医療を中心事業とし、関西学院との関係はより間接的なものとなっていくが、なおしばらくは高見町でセツルメント事業が継続された。しかし、1952(昭

和 27) 年には、その高見町にも病院分院が開設された。さらに 1960 (昭和 35) 年には、此花区春日出の現在地に新病院が落成、1975 (昭和 50) 年には新館が落成した。現在は、高度な地域医療の中核病院となり、2013 (平成 25) 年 4 月には此花区春日出中に新病院を建設して移転した。

4. 昭和初年の学生セツルメントと学生キリスト教運動

1920 年代から 30 年代にかけては、学生セツルメントが隆盛であったし、キリスト教界・キリスト教主義学校では社会的キリスト教運動や学生キリスト教運動が展開されていた。大阪暁明館の経営を関西学院が引き受けるに際して、これらと無関係に事態が進んだとは思えない。そこでまず当時の関連する社会的背景として検討しておく。

4.1. 学生セツルメントの状況

この頃、全国で学生セツルメントが隆盛であった。とりわけ東京帝国大学セツルメントが目ざされていたが、同じく官立では九州帝国大学にもあった⁷⁾。またキリスト教主義学校の明治学院や関東学院もセツルメントを開設し、上智カトリック・セツルメントもあった。だが、これらの学生セツルメントの多くは、特に昭和初年以降は左翼運動との関連を疑われて厳しい状況におかれていた。その筆頭は、東京帝国大学セツルメントであり「1930 年代の半ばにすべての学生運動組織が崩壊してしまうと、セツルメントは左翼学生の隠れ家となり、警察の眼が光るようになった。セツルメントで活躍していた学生の一連の検挙事件に引き続き、1939 年 2 月、文部省は解散命令を下し、セツルメントは 15 年にわたる活動の幕を閉じた」とする評価が妥当なものであろう (Smith, 1972 = 1978: 126)⁸⁾。

この解散前後の様子は、当時のマスメディアでどのように報じられたであろうか。たとえば『東

京朝日新聞』に「帝大セツルメント突如閉鎖に決す」と題して、以下のような記事が掲載された。

人民戦線第 2 次検挙により学壇に大弾圧を下した警視庁当局では、更に残存せる文化グループに対して第 3 次検挙を断行すべく着々準備を進めているが、之より先昨年 11 月上旬警視庁特高課では、本所区横川橋 4-7-2 帝大セツルメント (会長法学博士穂積重遠男) に働く帝大学生等が細民児童の救済並びに教育、社会事業の名のもとに、江東一帯の労働者間に左翼思想浸潤の役割を担当して来たという事実により、帝大学生約 20 名を検挙したが (……略……) 現下の非常時局下に同所で多数の帝大学生が働きその運動を助長する組織経営を存続させることは左翼思想の温床となる危険性が多分にありとの見解を有し、過般来文部当局でも内務省警保局並に警視庁特高部とセツルメント解消方につき慎重に協議を重ねていた。(……略……) 同セツルメントに籍を置いた学生約 260 名中党運動に関係して検挙された者が今迄に約 70 名居り、林房雄、菊川忠雄、浅野晃、武田隣太郎、久保栄二郎氏等も所謂この「オールド・セツラー」である。(『東京朝日新聞』1938.2.3. 朝刊、11 面。)

言うまでもなく「解散」は、1938 (昭和 13) 年のことだが、状況的にはこれ以前から左翼運動との関連性が濃厚とみなされる雰囲気は広がっていたのであり、したがって新聞という一般的なメディアが男爵を会長に戴く帝大セツルメントに対して「左翼思想の温床となる危険性」があると報じて違和感がなかったのであろう。

また九州帝国大学セツルメントについて九州大学の年史では、昭和初年の学生運動に参加していた学生を例に、以下のように記述している。

この当時の学生の左傾運動の実態を、放学

となった前記法文学部選科生某を通してみてみよう。この学生は高等学校在学中に読書会に加入して退学処分を受けたことがあったが、昭和5年九州帝国大学選科入学後の6年1月、セツルメントに参加してからふたたび思想が左翼化し……中略……8月12日検挙され、起訴されるにいたったのである。(九州大学創立五十周年記念会、1967:327)

昭和戦後期に発刊された九州大学の年史でさえ、まるでセツルメントが左傾学生の養成機関であるかのような表現だ。これは九州帝国大学における評価をある程度受け継いでいると思われ、戦前期にはなおさらこのような捉え方が一般的だったと考えられる。

では、キリスト教主義大学等ではどうだったのだろうか。

まず明治学院セツルメントである。この設立に際しては、「学院がこのセツルメント設立を企画したのは、もちろん社会科の実習のためということもあったが、 Kommunizismusの擡頭によって社会意識が高まった当時、過激な社会運動に走る学生の多い点を考慮して、専ら学生の関心を社会改善にむけて、あやまり少い学生生活を送らせようとする意図が、田川総理をはじめ学院当局者の間にあったことは否定できない」とされる状況であった(明治学院、1977:355)。しかし1934(昭和9)年3月にいったん閉鎖される。「閉鎖の理由は明らかでないが、共産主義学生退学事件(昭和8年10月)で、社会科学学生から退学者が出たことの影響もあったであろう」となっていて(明治学院、1977:357)、やはり閉鎖の原因は左翼運動にあるようだ。そして1936(昭和11)年12月に再建されたものの「再建セツルメントは、きわめて短命に終り、昭和12年6月には閉鎖された。それは、12年2月に天達、小松のセツラーが、荏原署に検挙されたことが遠因をなしていた」のだとされている(明治学院、1977:357)。

これによれば、1935(昭和10)年まで総理(院

長)だった田川大吉郎を初めとして学院当局者は、学生たちの左傾化を防ぐためにセツルメントを設置する意図を持っていたようだ。しかし、そうできなかったということだろう。セツルメントの責任者は三好豊太郎で、「監督者として督励し、指導したのは田川」であった(遠藤、2004:150)。だがセツルメント左傾化の実態は、田川や三好の力によっても、治安当局の姿勢には抗しきれない様相にまで展開していたのだろう。

次に関東学院セツルメントはどうだったか。このセツルメントは、横浜市の南太田町で開始されたが、社会事業部の教授・渡部一高や神学部の教授・友井禎などの指導によって、浦島町に移転し、1931(昭和6)年4月に建設された会館は「前進館」と命名された。ここでは「多くの人たちから信用されたが、この事業とともに、全国的におこったS・C・M事件が関東学院にも波及し、高商部、社会事業部、神学部の学生たちのうちから、数名の検挙者を出すにいたった。(中略)そしてついに1935年3月限りで、社会事業部が廃止されて、セツルメント事業も閉鎖されるようになった」とされている(柳生、1984:367)。S・C・Mとは学生キリスト教運動のことで、これについては後述する。当時この運動に関わって検挙された学生の一人であり(柳生、1984:377)、昭和戦後期に母校院長となった富田富士雄は「この時期の渡部先生の学問と思想はキリスト教を基盤としながら、当時の日本の社会的状況に対応して、アメリカ社会学からマルクス主義へと急速に傾いていった。(中略)従って日本の戦時体制への突入とともに、社会事業部もセツルメントも廃止されてしまった」としている(富田、1976:4)。この指摘では、教員が左傾化したために学生も左傾化し、それによって廃止されたということになる。総じて「関東学院の学生セツルメント活動は、社会改良主義的思想に基づく当時のいわゆる『危険思想』の一つとして取り締まりが強化され、運動の独自性に多大な制約を受けることになった」ということだろう(佐藤、2009:169)。

だがカトリック系の上智（カトリック）セツルメントは、状況が異なっていたようだ。最近の上智大学の資料では、以下のように記述されている。

戦前は日本も貧しかった。特に約10万5千人といわれる死者・行方不明者を出した1923年の関東大震災での惨状は酷かった。そのため上智大学教授フーゴー・ラサール神父は、学生たちと協力して、困窮者の多かった東京三河島町に上智カトリック・セツルメントを設立する案を発表した。学内の教職員や学生から多くの賛同を得たので、大学は委員会を設けて慎重に調査研究した。その結果、1931年10月にバラック4戸を借家として三河島町にセツルメントを設立し、ラサール神父は二人の学生とそこに住み込んだ。（無署名、2012b：1）

この事実は、『上智大学五十年史』では「東京のはずれ、三河島の貧民街に上智セツルメントが設けられたのも、昭和のはじめであった。カトリックの慈善事業の一環として計画されたものであるが、上智の学生が社会奉仕を行なう絶好の場でもあった。大学でも教鞭をとられ、アロイジオ塾⁹⁾の舎監でもあったラサール師がこの施設の中心であり、貧しい人々の更生のために全力をつくされた」と記されている（上智大学、1963：79）。

いずれにしても左翼運動の影響を思わせる記述はなく、学生の左傾化の危惧もなかったのだろう。そういう運動とは関係の薄いままで存続可能であった学生セツルメントもあったことがわかる。

この時期の社会事業界では、セツルメントは「社会事業の行き詰まり」の最後の砦でもあり、一部の学生セツルメントは協同組合化によって活路を見出そうとしていた。だがそれは成就することはなかった。つまり「1931（昭和6）年、満州事変の勃発を機にファシズムが台頭し、国家統制が強化された。社会事業界においてもファシズム化、全体主義化が急速に進展し、戦時体制にむかって

急転回していった。社会事業の大半はなし崩し的にその体制に無批判に迎合していき、セツルメントの協同組合化を主張した人々の中にも寄せ来る弾圧の波に抗し切れず思想の転回をなしていった」のである（菊池、1993：323）。

この時期の学生セツルメントについて「セツルメント自体は云う迄もなく民主主義的な学生、インテリの運動であったが、セツラーの多くはロシア革命とコミニズムにその指導理念の基礎をおいていた。そして、このセツルメント運動は単に東京帝大のみでなく、学生運動全体の一時期を画する重要性をもち、学生を更に深く国民大衆に結びつけることにもなるのである」とする肯定的評価もある（高島、[1957]1970：327）。だが昭和初年の左翼運動に対する当局の姿勢を斟酌すれば、「コミニズムにその指導理念の基礎」のあるようなセツルメントが容認されるはずはない。

これまで検討した学生セツルメントの状況を踏まえれば、関西学院で暁明館を引き受ける前提として、学院当局の責任者である神崎驥一が学生の左傾化に繋がるようなセツルメント構想を許すはずはない。この時期には、それに加えてプロテスタントの諸宗派にとって左傾化と関連深い運動があった。それがSCMなのだが、次に当時のキリスト教主義学校を取り巻くもう一つの背景として、そのSCMについて検討する。

4.2. 学生キリスト教運動

昭和初年のキリスト教主義大学および日本基督教青年会（YMCA）を揺るがしたのは、学生キリスト教運動（Student Christian Movement、以下SCM）であった。この運動は「1930年前後に日本基督教青年会（YMCA）同盟を母胎として急激な運動を展開したが、32年に分解していった学生キリスト者の運動のことである」とされている（土肥、1980：375）。しかし、日本のプロテスタント・キリスト教史において、SCMと社会的キリスト教運動（Social Christian Movement）は、「前者は一般に『学生たちの社会神学実践としての大学内

外への運動』とされ、後者はまた『プロテスタンティズムの中での伝統的な信仰の個人的内省的な理解から、社会結合関係の他者愛を通して信仰を社会化しようとするもの』と規定される」と説明されていて(井田, 1990: 25-26), 両者が無関係に展開していたのではないと理解できる。

こうした動きの背景は、以下のように説明されている。

世界大戦後の社会的苦悩に加えて、大震災後、日本の社会的不安はなお続いた。仏教各宗管長が華族として貴族院議員として特権階級の仲間入りをしているのに対し、1920年ごろから賀川豊彦、杉山元治郎、安部磯雄をはじめキリスト者らは右翼反動勢力と共産主義の攻勢の間に対処しつつ、再び日本の社会民主主義運動の中核として活躍していた。(中略) こうした教会の社会的動きのピークをなしたものはYMCA 同盟の夏期学校を母胎とする学生クリスチャン運動(SCM)であった。(海老沢, 1959: 203-206)

つまり「国家社会のファシズム体制への傾斜の中で、それに抗いつつ、ともかくも、社会改造の気運の残り火をともし続けた一群の青年キリスト者たちが存在した。『学生キリスト教運動(SCM)』がそれであり、殊に、この運動のイデオログの一人となった中島重^{しげる}が提唱した『社会的キリスト教(SCM)』」なのであり(倉橋, 2010: 2), 「この中島に、実践面において決定的とも言える影響を与えたのが、賀川豊彦であった」ということになる(倉橋, 2010: 2)。したがって「社会的基督教運動のかなり中心的な人脈に賀川の追従者たちがいたことは認めないわけにはゆかない。そしてこのような流れと純粋に学生青年会運動の神学的な理論を教会や大学や国家とのかかわりの中で実験してみようとするグループがみられることも事実である」という文脈になる(武, 1989: 250)¹⁰⁾。

さて中島重は、この2つの運動に対して指導的な立場にあったが、1929(昭和4)年に同志社から関西学院に移っていた。だが、これらの2つの運動について、関西学院側はどう受容したか。1946(昭和21)年に関西学院の教員となり、後年には長く院長も務めた久山康は、文学部助教授時時代に以下のように回顧している。

この運動はもちろん東京方面の学生の間で最も盛だったのでしようが、関西でも盛で、平素穏健をもって聞こえている関西学院でも、中島さんの始められたバイブル・クラスが盛になり、それまで讚美歌やキャンプ・ソングの練習を中心にしてきたようなキリスト教の集会在、それによって圧倒されるようになって行ったそうです。その頃文学部の教授だった松沢兼人さんも影響を与えたようですが、しかも学生は中島さんを置いてきぼりにして左傾し、学内にはアジビラが盛にはられたということです。(久山, 1956: 287)

もちろん「久山氏が伝聞を座談会において発言しているにすぎない」と信憑性を疑う研究者もあるし(井田, 1990: 26), 当時日本基督教青年会同盟学生部主事だった中原賢次は「(久山の談話が掲載された一筆者) この本のSCMに関する談話中筆者が一読しただけで事実と違っていると指摘できる点は十数カ所に及んでいる」と指摘している(中原, 1962: 297)。だがかえって関西学院におけるSCMの評価の一端は窺い知ることができる。

つまり「中島の思想はSCMに関しては関西学院をかすめて、素通りしてしまった。では社基(社会的キリスト教運動一筆者)はどうかというと、その後の関西学院において受容された形跡はほとんどない。(中略) それどころか、社基とは別に、やはりキリスト教独自の立場で国家・社会の中に福音の浸透を試みた『神の国運動』に対する批判は一度は堂々と登場する」という状況であった

(井田, 1990: 35).

運動そのものも、後年になって「昭和初期のSCM運動が国家権力によって崩壊させられて後は、〈危機〉はもっぱら内面の問題へと転向させられ、教会は〈福音主義〉を語りつつ保身延命の方向に向かう以外になかった」といった評価も受けることになった(高尾, 1969: 100). 結局のところこの運動も反体制的とみなされたのであろう.

5. 秋谷の思想的立場

ところで秋谷は、これらをどう考えていたのだろうか. 次に秋谷の思想的立場を明らかにしてみたい. それにはまず秋谷のレファレントパーソンについて検討し、次に秋谷自身の思想表明について見ておく.

5.1. 秋谷の原体験とレファレントパーソン

カール・秋谷一郎は、1909(明治42)年サンフランシスコ生まれで、定太郎・はま子夫妻の長男である. 定太郎は、千葉県東葛飾郡流山町(現、流山市)の出身である. 1876(明治9)年生まれで、1902(明治35)年に渡米している. 秋谷が関西学院に進学した前後の1921(大正10)年段階では、王府(オークランド)に定住していて、料亭吾妻亭を商った後、ニコニコ亭を経営していた¹¹⁾. 両親は、昭和戦前期以前では成功した一世としてよいだろう.

秋谷一郎は、当時の日系二世によくあったように両親の母国で教育を受けるため1915(大正4)年に日本にやってきた. そして叔父に育てられながら、大阪の小学校に入学、神戸に転校後もいくつかの小学校に通い、雲中尋常小学校を卒業した. さらに武庫郡西灘村原田(現・神戸市灘区)の通称「原田の森」にあった関西学院中学部に入学し、その後帰米するまで関西学院で過ごすことになる. 中学部時代の秋谷については、「中学部英語会も久しく不振なりしが、大正15年頃より、再び盛んとなり、外は秋谷一郎、梅津徳、堀田美之等

各地の大会に一等賞を得、内は諸校を招待して、英語弁論大会を開き、漸く世の認むる処と成るに至りぬ」と、学院史に名前が残されている(関西学院史編纂委員会, 1929: 180).

この時期、つまり人格形成期の秋谷にとって、原体験に相当するような出来事が自伝に記述されている. それは、「シン」という名の被差別部落に居住する子どもとの出会いと別れに関するものであり、米騒動を背景とした被差別部落居住者に対する差別の実態を垣間見た体験談である(秋谷, 1996: 16-23). この体験は、後年に秋谷自身によって書かれた「サム、ちょうという男」と題する中編小説のテーマとして扱われている(秋谷, 1955: 4-47). この小説冒頭には「部落差別は人種差別であるという誤った認識を与えかねない表現がある」とされる弱点はあるが(山本, 1998: 13), 「主人公が回想する最初の体験は、主人公の少年が被差別部落の少年と結ぶ友情であり、警官と兵士によって連行される被差別部落の人々を見たときの主人公の恐怖と義憤である. 読む人の心を圧倒するこの体験は主人公の差別問題を考える原点になる」ものだと評価されている(山本, 1998: 12).

秋谷がある意味では偶然に遭遇した体験を生涯の自己のテーマとして吸収し得た背景には、両親と一緒に暮らした伯父・伯母等の肉親に導かれた人間性もあったに違いない. しかし、それだけでは秋谷の強固な思想的立場の形成には至らなかっただろう. では、これらの肉親以外に、秋谷の人格や思想の形成に影響したレファレントパーソンは誰だったのだろうか.

秋谷が、中学部時代に「『恩師』以上の『恩師』」としているのが、内村順也であり、その虚無的な点を「先生が若い頃アメリカに渡り、日本人移民と一緒に労働者としての最低の生活に甘んじ、苦労を重ねながら勉強した経験が、そういった考え方を持つようにさせたのかもしれない」と分析している(秋谷, 1996: 65). 内村は、1880(明治13)年生まれで、1899(明治32)年に普通学部第7回卒業生となり、米国遊学等を経て1921(大正10)

年から1943(昭和18)年まで中学部教員であった(井上, 2001: 213-216)。内村鑑三の末弟であり、娘婿は和田洋一である。秋谷は、自分の帰米後で直接関係のないことであるにもかかわらず、その和田が治安維持法違反で執行猶予付きの判決を受けたことに触れて、内村が和田の入獄中に老体をものともせず差し入れに通い、和田等の釈放にも尽力したことを指摘している。つまり左翼思想への偏見がなかったというのである(秋谷, 1996: 67-68)¹²⁾。

中学部卒業後の1927(昭和2)年、秋谷は関西学院文学部英文学科(専門学校)に入学した。「教授陣の中には、その後、全国的に名をはせるようになった河上丈太郎(社会党の十字架委員長といわれた)、松沢兼人(兵庫県選出の国会議員)、柳宗悦(講師、日本陶芸界の泰斗)等がいた」と回顧している(秋谷, 1996: 73)。

学院史は、1921(大正10)年に関西学院が神学部、文学部、高等商業学部の3部制に移行した後のこととして、以下のように記している。

(文学部一筆者) 社会学科は開設時において、社会教育にかかわる指導者養成から新聞雑誌などマスコミ活動に従事する青少年の養成までを掲げたために、その目的とするところがかえってとらえにくい傾向を持っていた。しかし1918(大正7)年に河上丈太郎(経済学、統計学、法律学)が教授として着任して、社会問題研究を軸とする方向性を明確に打ち出した。河上丈太郎(1889-1965)は衆議院議員となり、29年3月に学院を辞任した。以後19年4月就任の高田保馬(1883-1972)、21年就任の新明正道(1898-1984)、23年就任の松沢兼人(1898-1984)などによってその体制が確立されていった。(関西学院百年史編纂事業委員会, 1997: 367-368)

秋谷は、河上の選挙運動に加わったことも回顧しているので(秋谷, 1996: 86-91)、河上の名を

挙げることはわかる。しかし在学したのは英文科であるにもかかわらず、松澤の名まで挙げているのは(新明は秋谷の入学前に東北帝国大学に異動していた)、当時から「社会問題」に関心を持っていたことの証左であり、これらの教授陣に影響を受けたのであろう。

さらに北野大吉もレファレントパーソンと言えよう。秋谷は北野からペンティ(恐らく北野の訳したArthur J. Penty『キリスト教社会学』1925. 聚英閣)を借りて読み、影響を受けたらしい。「私は、北野先生から借り受けたペンティの著書を読んだ。理論とその実践は、空想的な社会主義の域を出ないものであるが、社会主義と言う考え方が私に影響を与えたことは事実である」と明記しているからである(秋谷, 1996: 132)。

秋谷はもう一人、柳宗悦の名を挙げているが、柳は当時ペンティに心酔していたとされる(中見, 2004: 204)。当時は関西学院の講師であり、北野らとともにギルド社会主義を紹介していた。「ペンティは、1910-20年代の日本では、アナキズム的な思想傾向を持ったギルド社会主義者であり、カーペンター、モリス、ラスキンの系譜に立つ思想家として紹介されていた」のである(中見, 2004: 206)。そもそもセツルメント運動とアーツ・アンド・クラフツ運動は、関わりが深いとされ(藤田, 2004: 195)、秋谷が北野や柳の紹介する思想に共鳴したとすれば、英国型のセツルメント運動を目指しても不思議なことではない。

5.2. 秋谷自身による思想的立場の表明

このようなレファレントパーソンからも秋谷の思想は窺えるが、秋谷自身がそれについて語った内容からも、彼が自由主義的な平和主義者でキリスト教社会主義の立場を取ろうとしていたことがわかる。たとえば、以下のように書いている。

私の学んだ関学は、キリスト教を教育の精神としたミッション・スクールだったし、また私自身も青年期を、いわゆる大正デモクラ

シーの洗礼を受けて育ったので、考え方は自由主義的であり、人道主義的だった。キリスト教信者になった私が関学の専門部(文学部)に入ったころ、次第に台頭してくる、日本政府の軍国主義的傾向に嫌悪を感じ、平和主義者にもなっていた。だから日本で1925年(大正14年)、最初の普通選挙が実施され、その選挙で私の恩師、河上丈太郎先生が日農党から出馬して当選、8人の無産政党国会議員になるという画期的壮挙に歓喜したのだった。また、『死線を越えて』で有名になった賀川豊彦の神戸貧民窟の仕事にも、クリスチャンとして手助けするようになった。(秋谷、1986:122)

この時には「キリスト教社会主義」という表現は使っていないが、別に「北野先生は自分をクリスチャン・ソシアリストと言っておられたが、そうすると河上先生も同じである。私は、自分をクリスチャン・ソシアリストと自負しても、何が悪いかと考えるようになった。……略……私は、クリスチャンである立場は変えないが、無産者を解放するという社会主義の考え方にも同意するようになっていった」と述べている(秋谷、1996:132)。このような自覚の背景には、当時キリスト教界やキリスト教主義学校に進出していた学生キリスト教運動や社会的キリスト教運動のうねりがあり、秋谷もそれを実感し、向き合った上での思想の闡明化だったと思える。

6. 関西学院学生奉仕団の誕生と秋谷および学院当局のスタンス

秋谷は、こうした思想的煩悶の帰結に至る前後、文学部2年生の時にクリスチャンとして信仰上の懐疑を抱いた。「貧困に苦しめられ救いを求めている人が夥しくいる。それらの人に救いの手をさしのべるには、『祈りの糧』のほかに物質的なものを与えて何故いけないのだろうか、と考えた」と

いうのである(秋谷、1996:98)。そして賀川豊彦の神戸・新川での活動を手伝ったことがきっかけとなり、以下のように決心し、活動を始めたという。少し長いがそのまま引用する。

関学の中に社会事業活動を起こしてみようと決心して、宗教主事や諸教授、それに興味を持ちそうな学生に呼びかけた。大きな反響があった。私は「社会奉仕会」と名付けてその組織づくりにとりかかった。私に、社会事業の経験は全然ない。まず、学院当局が正式に主催する組織として財政的な出資を約束してもらい、各部、すなわち文学部、高等商業学部、神学部、中学部から代表者を選び、東京および大阪の社会事業を視察する計画を立てた。その視察団の団長はもちろん私である。大阪では、市役所の社会事業と淀川区、東京では青山学院のYMCAと協同して、市役所の社会事業、また東京帝国大学セツルメント、日暮里の街等を視察、研究して廻った。もちろんこれらの中には、キリスト教関係の社会事業も含まれていた(たとえば、東京では、賀川豊彦の直弟子の高橋という人が経営していた「浜園のテント村」、大阪ではまた賀川氏と関係のある牧師・吉田源二郎氏の経営する社会事業等)。/この視察旅行で、私は社会事業というものの実際の活動を知った。視察旅行を終えて学院に帰ると、早速、学院主催の社会事業の大講演会を開催した。その当時、社会事業問題の理論的泰斗だった大原社会問題研究所の大林宗嗣氏を講師として招聘しての、「資本主義社会における社会政策」という題の講演だった(大林氏は、左翼理論家というので少々問題になったが、ほかに適切な人がいなかった)。講演会は大成功に終わった。/そうして、私の社会事業の実際活動が始まった。当時、大阪の北区にキリスト教関係の「暁明館」という社会事業館があった。財政難に陥っているというので、それを

関学で引き受けてたて直してみようということになり、話し合ってみた。その結果引き受けることになった（私は、それを引き受けるのが決まる直前にアメリカに帰った）。その「暁明館」は、現在でも健在しているとのことである¹³⁾。（秋谷、1996：98-99）

この引用部分には、秋谷の思想的立場と関西学院当局者の思惑が交差した状況について考えるための重要なヒントが出てくる。そこでまず学生奉仕団の誕生について、『關西學院新聞』の記事で確認してみよう。それは「第一回事業として 震災地へ義捐金を 新しく生まれた 学生社会奉仕会」として以下のように報じられた。

最近学生奉仕会が呱呱の声を挙げた。ベーツ院長始め学院主脳者並びに社会的知名の氏を評議員に網羅し神崎部長及び各学部此の此の方面の研究と興味を有する諸教授を理事に迎え学生の主事連は盛んに組織に努めている。/この会の組織に至る迄の動機は去る11月初旬東京日暮里にある愛隣団のプライス氏から招待を受けたのを機会にベーツ院長並びに柳原礼拝主事の奔走に依って各学部から一名宛上京せしめることとなった。この社会施設調査見学団は東都における各方面を視察して貧民街の生活状態並びに之に対する社会施設を見学して帰院し、此処に於て学生社会奉仕会の組織を見るに到ったのである。（『關西學院新聞』59号、1930.12.20、3面。）

これによれば学生奉仕団が誕生したのは1930（昭和5）年の年末近くであったらしい。秋谷はすでに文学部3年になっていたはずだ。この記事には秋谷の名は登場しないが、後に検討する記事からすれば、中心的存在であったことは間違いない。「プライス氏」については後述するが、記事ではそのプライスが招待してベーツや柳原が奔走したとなっていて、秋谷の回想とイニシアチブを巡

る雰囲気は異なっているが、この段階から学院が関わっていたことは間違いない。「愛隣団」については、秋谷は「日暮里の街」としか記していないが、「浜園テント村」の方は印象深かったようだ。「賀川豊彦の直弟子の高橋という人」とは高橋元一郎のことで、彼のテント村は以下のように短期間の社会事業であった。

高橋の活動時期は、1929（昭和4）年3月、当時牧していた岡山の落合教会を辞して東上し、賀川豊彦やその関係の人と交わりながら、あるいは自らもスラムでの生活を体験し、当時東京のスラム地区の一つ、深川の浜園町にテント村を建設し、失業者達とともに生活し、彼らの更生と生活指導並びに伝道に当たった31年夏までの僅々2ヶ年の活動にすぎない。（室田、[1989]1994：423）

したがって、秋谷がこのテント村を訪ねることができ、しかもそれに強い印象を受けたのは、当然とはいえ稀有なことであった。高橋が賀川と関係が深かったというだけではなく、「社会主義に対して親近感を持っていたことは確か」なのであり（室田、[1989]1994：446）、その点でも秋谷の記憶に残ったのだろう。

吉田源治郎との関わりは、『關西學院新聞』にも「研究と実践に余念ない奉仕会 社会事業の見学」と題して、以下の記事がある。

去る廿三日学生社会奉仕会が、四貫島セツルメントの吉田源次郎氏指揮の下に、大阪市内貧民窟調査及社会事業見学に行った。/参加人員は15名であった。亦この冬休暇を利用して、学生奉仕会の会員の人々は、次の場所で社会事業の為に奉仕される筈である。/・神戸イエス団/・四貫島セツルメント。（『關西學院新聞』60号、1931.1.20、3面。）

その他の見学先は、東京帝国大学セツルメント

は確かだが、他は大阪では北市民館、淀川善隣館か基督教ミード社会館あるいは両方、東京では市の設置する市民館だったのではないかと推測できる。

もう一つ秋谷が演題まで含めて言及している大林宗嗣について検討しよう。この当時の大林の思想については「1924年の段階では、大林は人道主義の立場にあり、社会主義には未だ懐疑的であったことについては先に述べたとおり。しかしながら、次第にフェビアン主義そして、マルクス主義へと、科学的社会主義へと舵を切ることになる」とするものや（梅木、2008：53）、「1930年からは大阪労働学校の講師となり、……中略……彼が当時の日本の現実の中で選んだのは社会民主主義の道であった」とする指摘がある（永岡、1984：269）。いずれにしても当時の状況下では、左翼的とみられて当然であっただろう。

大林の講演会については、『關西學院新聞』で「理論と実践の闘士大林宗嗣氏の講演会開かる 学生社会奉仕会」として、以下のように報じられている。

学生社会奉仕会はその飛躍の第一歩として大原社会問題研究所々員大林宗嗣氏を迎え商科階下合併教室に於て去る2月13日「資本主義社会における社会政策批判」なる演題のもとに有意義に開催された。……略……かくの如き社会状勢の下に於ける社会政策として、セツルメントにしくはなし。この機関を通じ我々は時代に適応した運動をなすことが出来る。（『關西學院新聞』62. 1931.3.20. 3面。）

大林の講演会は2月13日であり、5月には『關西學院新聞』が「大阪四貫島の暁明館を後継か？ 学生社会奉仕会の活動」という見出しで、秋谷へのインタビューを「奉仕会の主事秋谷君の抱負を聞けば『発会后未だ日も浅く又経済的に苦しいが今年には實際的社会奉仕に必ず為す所ある覚悟です』と

力強く語った」と報じた（『關西學院新聞』64号. 1931.5.20. 3面）。

ここで秋谷自身の行動についても言及しておくべきことがある。この頃の秋谷は、劇研究会にも属していたが、1931（昭和6）年の12月、その年の文化祭で演じたロシア作家の作品を関西の新興劇団連合の大会を浪速座で開催して、そこでも演じようとしたことに関連して起こった出来事である。これに関しては、秋谷もこの作品「壁」¹⁴⁾が警察当局の検閲を通らなかったため、改作して上演したとしている（秋谷、1996：115-118）。同様に『關西學院新聞』は「不当検閲の犠牲」として「文化祭で通過してゐながら浪速座で禁止される……。同じ大阪の土地で時期もさう距たつて居らないに拘らず去る12月21、2、3日の3日間、道頓堀浪速座に於ける全関西新興劇団公演に際して其同日前3日の19日突如絶対上演禁止を宣告された」と報じている（『關西學院新聞』60. 1931.1.20. 3面）。この関西学院劇研究会は、後年になって思想検事に「劇研究に名を藉り階級意識の宣伝煽動を行つて居た」と報告された団体であった（松村、1941：67）。こうしたことからすれば、学院当局が秋谷の思想と行動に相応の注意を払っていたと考えても良いのではないか。

ところで大林の講演では、セツルメントが取り上げられていた。つまり左翼的とみなされていた講師によってセツルメントが推奨された。それに対して学院当局は、秋谷を主事とする学生奉仕団が、賀川豊彦の路線や大林宗嗣の考え方に沿って暁明館のセツルメント化に乗り出すことに対して危機感を持ったかもしれない。むしろ慎重にそれとは違った方向性を採ろうとしたのではないだろうか。

7. 学院当局の動き

ところで、大阪暁明館の経営に乗り出すに際しては、学院側では理事で高等商業学部の責任者であった神崎驥一がキーパーソンであった。

神崎は、1884（明治17）年生まれで、1903（明治36）年に関西学院高等学部を卒業後に米国留学し、カリフォルニア大学・同大学院を修了した。つまり秋谷の父とほぼ同時期に渡米し、在米エリートとして最高学府に学んだことになる。1915（大正4）年2月から1921（大正10）年4月まで在米日本人会書記長を務め、いわゆる排日移民法に反対する運動では活躍した¹⁵⁾。

ところでこの在米日本人会については、兵役免除や居住証明業務を領事館から請け負って、その手数料で維持されていた団体であり、ロジャー・ダニエルズ（Roger Daniels）の論評「半官的と呼ぶうるものであったことは、まちがいない」とする指摘が妥当だとされている（Wilson & Hosokawa, 1980=1982: 105-106）。この半官的な団体で書記長を務めていた神崎は、在外公館のエリートと同様に「もっぱら日本帝国の対外的威信の問題に心を奪われていたので、移民の着実な同化過程をみる目をもたなかった」のであろう（麻田, 1993: 295）。

たとえば、秋谷が関西学院文学部英文学科（専門学校）に入学した1927（昭和2）年、神崎は以下のような論文を認めている。

日本人が米国民に対して批評をする時に必ず出て来る点は、一体米国人なるものは彼等が云ふ如くに、そしてまた久しくそう考へられて居た様に理想主義の同義的な国民であるか……略……それとも彼等はずととも善良な市民であったが、多くの異民族が流れ込んだり、富の増加の為に資本主義勢力が国家を支配し、又民心が弛緩し、加ふるに極東政策に対する彼らの野心の為に清教徒以来の高潔なる血液が、墮落の泥池に流れ込んだのであるかと云ふ事である。私自身の心持を云ふなれば大統領ウィルソン去りたる後の米国に対しては、大いに失望し、又かなり愛憎をつかし居るのである。（神崎, 1927: 37）

この神崎の論文を秋谷が直接読む機会があったかどうかはわからない。それにしても神崎が米国に対してこのような見方をしていたのだとすれば、日系米国人でもある秋谷が素直に肯じられたらどうか。神崎の姿勢は秋谷に全く不快感を与えなかったとは思えない。中学部時代の恩師である内村順也に対しては「日系アメリカ人としてのさまざまな問題を持ち出したが、先生は嫌な顔一つせず聞いて下さった」と回顧しているが（秋谷, 1996: 66）、少なくともそれとは異なった思いを持っただろう。それは、神崎があえて擁護する意義を感じない思想であっても、秋谷には信じるに足るものである可能性が高かったという程度の思想的立場の相違をもたらしものではなかったか。

神崎は、関西学院が暁明館の経営を引き受けるにあたって、学院理事のプライス（Price, Percival Gardiner）を通して、谷川貞夫に調査依頼をした。プライスは、「カナダオンタリオ州生まれで、カナダメソジスト教会のビクトリア大学を出て接手札を受け、日本に赴任」していた（塩入, 2006: 29）。彼が小林弥太郎の援助を受け、根岸と日暮里元金杉で始めたのが愛隣団の隣保館であった。学生奉仕団は活動開始に際して愛隣団も視察していたことは、先に触れた。

プライスの後援者であった小林は、神戸の鈴木商店で働いていた1902（明治35）年から4年間、当時関西学院院長であった吉岡美國の家で世話になっており、この時のことを「御家庭の一員として過させて頂いた4年間」としている（小林, 1958: 5）。神崎驥一もそれと前後して吉岡に世話になっているだけでなく、吉岡の女婿でもある。こういう経緯からすれば、プライスと神崎は、直接面識があったかどうかはともかく、意思疎通に障害はなかっただろう。

このプライスの下にバット（Bott, George Ernest）がいた。バットは、「西の賀川・東のバット」と称される社会事業家であった（新堀, 1994: 36）。この二人の関係については、以下のよう

あったとされる。

東京ではじめた社会事業によって賀川はこの地（江東一筆者）で人脈を広げていった。同じ社会事業家ということで誼^{よしみ}を結んだのが「東京東部ミッション」の責任者P・G・プライスであった。カナダ・ミッションと日本メソジスト教会が行っていた社会事業は、当然、賀川の強い関心の的となった。やがて賀川はプライスの下で働いていたバットの存在に興味を持つにいたる。……略……昭和に入り、バットが「東京東部ミッション」の統括責任者になった頃には二人はすっかりよきパートナーとなっていた。（新堀，1994：35-36）

つまり関西学院学生奉仕団が見学に訪れた頃の愛隣団は、プライスからバットへの移行期であり、バットは賀川との関わりを持ちつつ、それとは異なる実践をしていた。バットは1892(明治25)年、カナダのオンタリオ州で代々熱心なメソジストの家庭に生まれ、トロント大学ビクトリア神学校を卒業し、宣教師として1921(大正10)年に日本に来ている。つまりプライスにしろ、バットにしろ、メソジスト系の学校である関西学院の当局者が暁明館をセツルメント化するに当たって相談すべき相手としては、当然の人材であった。そして実際には谷川貞夫がアドバイザーとして派遣されたのである。

谷川は「若い頃、神戸の母教会(旧日本メソジスト神戸東部教会—カナダ系—)とのかかわりから、カナダ・ミッションの日本代表(東京地区)であったプライス氏に行き会う。それが谷川氏の生涯を方向づける重要な瞬間であった」という出会いの結果(重田，1984：705)、この頃は愛隣団の主事をしていたのである。その谷川は、昭和戦後期に以下の回顧を残している。

神崎先生を理事長とする河辺満麿，原田脩

一、柳原正義各氏の関学教授団、ランバス女学院の田中貞院長等を中心として理事会が組織され、学生セツルメントとして再出発したわけであって、そこには、大学エクステンションとしての実践をも企図されていた筈である。わたくしが、暁明館に関係するようになったのは、そのように、いまだ組織も確立していないときであった。当時カナディアン・ミッションのピ・ジ・プライス氏が、関西学院の理事であった関係から、神崎先生の希望によって、学生セツルメントとしての方向づけのための社会調査と、その事業の指導のために、協力者を派遣するということからであった。（谷川，1951：30-31）

谷川は、その時点での暁明館を「労働者宿泊所というもの、古い大阪的形態」としている(谷川，1951：32)。つまり学生奉仕団が引き継いでセツルメント化する直前に谷川が関わるようになったのは、確かであろう。さらに谷川の回想を続けよう。

(プライス一筆者)氏は、神崎院長の希望に応じて、わたくしにサヴエ(サーベイ一筆者)をするよう委嘱した直接の人であるからである。もっとも、プ氏がわたくしを暁明館のために派遣した一つの理由は、当時大阪における社会事業界の人々を、私が比較的よく知っていたからでもあろう。/その頃、関西社会事業界では、理論的指導者であり事実上の行政的中心者であった大阪府の社会事業主事、川上貫一氏(共産党代議士として勇名をはせた)をはじめ、大阪市社会部長山口正氏(故人)、民間では富田象吉氏(故人)、佐伯祐正氏(故人)、林文雄氏、八浜徳三郎氏、浜田光男氏等の人々が活躍しておられた。/暁明館の企画について、わたくしは、これらの人々、およびその他の人々に何かと特別の厚意と便宜とを頂いた。(谷川，1951：31-32)

ここには治安維持法違反で逮捕直前の川上や仏教（浄土真宗）系の佐伯、同じく浄土宗の林まで出てくるにもかかわらず、賀川豊彦や吉田源治郎の名は見えない。秋谷の回顧でも『關西學院新聞』の記事でも、学生奉仕団が賀川の事業（神戸イエス団等）に関わったり、吉田の事業（四貫島セツルメント）を手伝ったりしていたことが出てくる。しかも四貫島セツルメントは、暁明館と同じ四貫島の地にある。彼らが「およびその他の人々」に入れられているとすれば、不自然の感を拭えないのである。

ところで吉田久一は、この当時のキリスト教系セツルメントについて以下のように指摘している。

（セツルメントの一筆者）キリスト教型は「人格の交流」を目的とするが、その方向に二つある。一つは賀川豊彦の指導による神戸のイエス団無料施療所及び友愛救済所などで、いわば社会改良型で、生活協同組合方式をとっている。今一つはアメリカ型の興望館その他でケースワーク、マスワーク、コミュニティ・ワーク、ボランティア・アクション等が行われ、施設代表者にライシャワー、バット等のアメリカ人の名もみえている。（吉田、1984：12）¹⁶⁾

賀川系のセツルメントは、生活協同組合方式であるのに対して、興望館型は違うということだろう。「バット」は、恐らく G. E. バットのことであろうから、カナダ人であるが、「ライシャワー」は、オーガスト・カール・ライシャワー（August Karl Reischauer）だとすれば、米国人で長老派である。要するに北米プロテスタントの宣教師たちであり、1930年前後からソーシャルワークを展開しつつあったアメリカ型セツルメントを移植しようとしていたとする指摘だろう。

一番ヶ瀬康子も同様に以下の指摘をしている。

日本において、英国流の社会教育的セツルメントは学生セツルメントの流れに、一方、米国流の社会事業的なそれは、まことに形体的ではあったが、民間および公立のものにうけつがれていったという事実である。そして前者が、対象を明確に労働者階級においたのに対し、後者はたんに貧者あるいはめぐまれないもの、さらに勤労者、国民一般というように、きわめて不明確なものにおいたところに、したがって、本来的にはセツルメントでなかったところに特徴があったといえよう。（一番ヶ瀬、[1964] 1971：209）

吉田の指摘するアメリカ型セツルメントは、一番ヶ瀬によれば、本来的なセツルメントではないということになる。こうした見解は「日本では大学セツルメントをはじめとする一部の例を除いて、こうした（セツラーやボランティアの社会認識の変革をも生み出すという一筆者）本質的な役割は十分発展しなかった」とする指摘に繋がる（永岡、1986：16）。そして1910年から20年にかけて設立された大阪のセツルメントは、明確にセツルメントの意図をもって設立されたが、1930年代に登場するものは、宿泊保護施設から転じた暁明館のようにセツルメントとして典型的ではないとされることになる（永岡、1993：206）。

つまり大阪暁明館がセツルメントとして再出発する時期には、すでに社会改良的セツルメントの絶頂期は過ぎていたのである。したがって、社会変革志向の希薄化したセツルメントでなければ、存在し続けることはできなかったのだ。

8. おわりに

秋谷は、キリスト教社会主義の立場から賀川豊彦系、つまり英国的な協同組合型セツルメントの構想を抱いていたに違いない。しかしそれは当時の社会的風潮の中では、左翼運動的であるとみなされ、学生の左傾化を招くとして危険視されるも

のであった。したがって、この時点で神崎を初めとする関西学院当局者が、後世にはセツルメントの典型ではないと評価されることになるアメリカ型セツルメントを選択したのは当然であったろう。先述したような秋谷と神崎の思想的相違が具体化した結果とも言えるかもしれない。だが秋谷は学院の選択に賛同できなかったはずだ。秋谷が述べたと『関西学院新聞』が報じた「各自それぞれ意見を異にして」という言葉の中に、この相違が凝縮されているのだろう。

ところで秋谷は自伝で、帰米に際して二人の学院教職員から励まされたことを記している。一人は中学部時代の「恩師中の恩師」である内村順也である。

私（秋谷一筆者）がずっと後に、関学専門部に入ってから、将来、教員を志し、母校関係の教育発展のために全生涯を捧げるべきか、それともアメリカ市民としてアメリカに帰るべきかで悩んだ時も先生に相談した。その時、先生が、あれこれ自分の意見は言わず、即座に、「君は、アメリカに帰りたいまえ」と言われたのに驚いたが、この一言が、私が帰米を決心する動機を与えてくれることにもなった。（秋谷、1996：66）

もう一人は配属将校であった成川博である。成川に帰米の意思を伝えた時「僕は君の決心に賛成する。君はアメリカの市民だから、アメリカに帰って、アメリカに忠誠を尽くすのは当然のことだ」と言われ、軍事教練でたてついてきたことを恥じたと書いている（秋谷、1996：105）。この成川について学院史は「配属将校の中には学院に着任後校風になじみ、洗礼を受けてクリスチャンになり、そして軍籍を離れた後も職員として学院に残り、同僚・学生からその人柄を慕われた成川博大佐のような例もあった」と記している（関西学院百年史編纂事業委員会、1997：544）。秋谷の回想時点である昭和初年には、まだ現役軍人であっ

た段階ですでに後年の片鱗を感じさせる逸話である。

このように秋谷は帰米前にすでにアメリカ人として生きることを決意していたらしい。これまで検討したように秋谷が学生奉仕団で取り組もうとしたセツルメントの方向性は神崎を初めとする学院当局者と異なっていたのは間違いないだろう。そしてそのことは秋谷の帰米を促し、日本国籍の放棄と学院の中途退学の引き金になったかもしれない。

秋谷は、帰米直後は父親が買い取っていた「小川ホテル」¹⁷⁾を手伝っていた。その後は、様々な職を転々としつつ、大恐慌、第2次世界大戦、マッカーシイズム等を背景に労働運動、公民権運動、日系人に対する賠償請求運動、反核・平和運動等に関わった。しかし、キリスト教社会主義の立場は維持していた。たとえば、後の彼の文芸活動について、以下のような指摘がある。

『NY 文藝』が生まれるまでの動きを見ると、芳賀武、あべよしお、秋谷一郎、貴田愛作が重要な役割を果たしているが、これらの人々の間に共通する一つの特徴点がある。それは社会主義への確信あるいは期待であり、反ファシズム・反軍国主義の姿勢である。これらの人たちが戦時中、連合軍やアメリカ政府の情報機関で働いたのはこのような立場からであった。（山本、1998：6）

そして、このような多彩な活動の評価は、1987（昭和62）年に「マーチン・ルーサー・キング二世記念生涯の業績賞」として結実した。関西学院はそのことを讃えて、秋谷を日本に招待した。

一方、大阪暁明館の戦後はどうなったか。中島重等とともに社会的キリスト教運動に取り組み、1948（昭和23）年から関西学院大学文学部教授になっていた竹内愛二は、大阪暁明館が病院中心の事業へと転換するに当たり、以下のように記している。

関西学院学生セツルメント大阪暁明館は昨年（昭和26年）11月23日その創立20年の記念式を開催した。処が数日後に筆者は暁明館は今後専ら医療事業施設として運営され、又内外の資金を獲て大いなる拡張がなされるということを知った。……略……セツルメント事業については、何等法律の条文に規定されていないのみならず、一般にその理念も、総合的救済事業施設という風に推察すれば、存在の余地があるという位にしか考えられていないのである。（竹内、1952：37）

この年に制定された社会福祉事業法は、セツルメント（隣保事業）を社会福祉事業と位置づけていなかった¹⁸⁾。かつてアメリカ型セツルメントを選択し、被占領期まで残った大阪暁明館は、そのために事業種の転換を図った。それにともない関西学院との関係も変化していった。

婦米二世カール・秋谷一郎は、大正末期から昭和初年の関西学院を駆け抜け、その学生生活を「学生奉仕団」に結実させて日本を去った。秋谷の離日の結果、その思惑とは異なったかもしれないが、大阪暁明館がセツルメントとして生き残っただけではなく、現在も地域の基幹病院として存続し、重要な役割を果たしている。もっとも秋谷が関西学院で過ごした若き日々の思想形成は、彼の米国民としての活動を支えたこともまた確かなようだ。

秋谷は、2001（平成13）年2月8日、91年の生涯を閉じた。婦米からすでに70年が過ぎ去っていた。

注

1) 「関西学院学生奉仕団」の名称については、各種資料、論文等によって学生奉仕団、学生奉仕会、学生社会奉仕会、社会奉仕会等、多様である。本稿では、1940年代初期に発行されたと推測できる『財団法人関西学院学生奉仕団大阪暁明館要覧』および1942（昭和17）年発行の『十周年並ニ文徳寮落成 感謝記念』と題した小冊子の発行元

表示「関西学院学生奉仕団財団法人大阪暁明館」に従うこととする。

- 2) 2013（平成25）年4月1日にオープンした新病院では、最上階に伝道所が置かれた。
- 3) 「婦米二世」とは、米国移民一世の子として米国で出生、幼少期を過ごし、親の母国である日本に渡って教育を受けた後、再び米国に帰国した二世のことである。
- 4) 秋谷は、昭和戦後期に米国から出した手紙（航空便）の差出人欄に「K. I. Akiya」と署名している。恐らく「Karl Ichiroh Akiya」だと思われるが、正確に確定できていない。本稿では氏名の英語表記を「Karl Akiya Ichiroh」とした。
- 5) 年史や記念誌等の資料類は、以下のようなものがある。
 - ・『財団法人関西学院学生奉仕団大阪暁明館要覧』1940?
 - ・『十周年並ニ文徳寮落成 感謝記念』関西学院学生奉仕団財団法人大阪暁明館、1942。
 - ・『二十周年記念 暁明館の歩み』大阪暁明館、1951。
 - ・『創立二十五周年記念社会福祉法人大阪暁名館の概要』大阪暁明館病院、1957。
 - ・『80年永き福祉の歩み 大阪暁明館物語』大阪暁明館、1995。
 - ・『晨に星を戴いて—大阪暁明館創立90周年記念誌』大阪暁明館、2005。
- 6) もっとも廣岡は、直後に急逝しており、常務委員在任は最初期の1年程度である。
- 7) これより以前には、たとえば宗教大学（現・大正大学）がセツルメント活動（マハヤナ学園）をしていたし、佛教大学（現・龍谷大学）と関わりが深いルンビニ学園（蛍雪会）もあった。
- 8) 引用した新聞記事や他の史料で確認すると、解散した年は1938（昭和13）年であり、存続期間は15年でなく「14年」が正しい（福島・石田・清水、1984：459-470）。
- 9) 学生寮全体が「アロイジオ塾」と名づけられたのは、1920年10月31日のことである。『上智大学史資料集第二集』は、ヨゼフ・ダールマン神父が、寮に住む東京帝大や慶応義塾大の学生たちの「カトリック学生連盟」の発足祝賀会において、初めて「聖アロイジオ塾」という寮名を使った、と伝えている（無署名、2012a：1）。
- 10) ところで、このSCMについては昭和戦後期になって「約3ヶ年の間、YMCA同盟を後盾として継続して来た所謂SCM学生基督者運動は、事

実上マルキシズムへの発展的解消によって終始したのである」とするものや(都田, 1951: 36), 「一般にキリスト教界, 特に教会の人々にこの事件(いわゆる SCM の夏季学校事件—筆者)は悪い印象を与えた。また一般に学生 YMCA 運動は, 各学校当局からも警戒され, 教会からは白眼視された。当面の指導者たちの責任が問われた」とされ(奈良, 1959: 288), 具体的には「同盟総主事寛光顕, 市都主事松沢光茂, 学生部主事中原賢次は昭和7年12月5日をもって引責辞任した」とするものがある(奈良, 1959: 289)。しかしこの後者の評価についてその当事者であった中原は「善意と好意に満ちた書き方であることは充分にうかがえるが, SCM に対する理解については疑問が多い」としている(中原, 1962: 297)。さらにその後も「S・C・M の史実にもどるならば, 彼らの『神の国』はもはや自らもそこから成立したキリスト教の一切の形態と訣別する道をたどることになる」という評価もある(武, 1977: 58)。つまり昭和戦後期も評価は定まっていないことだろう。

- 11) この項は, 1922 (大正 11) 年に桑港 (サンフランシスコ) の日米新聞社が発行した『在米日本人名辞典』および, 秋谷 (1996: 40-46) によった。ただし, 秋谷 (1996: 40) では渡米の年は「サンフランシスコ地震の前と言っていたから, 1905 (明治 38) 年頃ではないかと思う」となっている。この地震とは, 1906 (明治 39) 年 4 月 18 日早朝に発生した地震のことであろう。1902 (明治 35) 年でも地震前という記憶と相違しておらず, より確かだと思える。定太郎は 1921 (大正 10) 年頃に帰日したようで「父はその頃, オークランドで日本料亭を開業して, 母と二人で, 人を雇わずにきりもりしていたので, 後を誰にまかせて帰日したのかは知らない」となっているが(秋谷, 1996: 40), 吾妻亭からニコニコ亭に至る狭間に帰日したのだとすれば矛盾がない。
- 12) 後年の和田について, 内村が「私たち夫妻とともに現在京都で健康にくらしている」としているので(和田, 1961: 24), 晩年は釈放に尽力した女婿とともに過ごしていたということになる。
- 13) これ以外にも「夙川でのヒルバーン先生の運動」も手伝ったとしている(秋谷, 1988: 12)。S・M・ヒルバーン (Hilburn, Samuel Milton) は, 米国人で 1926 (大正 15) 年に学院に着任し, 戦時中は帰国したが, 戦後再来日している。彼は, 昭和戦前期に夙川ではなく尼崎で失業救済事業のフレ

ド社を始めたことが新聞で報じられている(『大阪朝日新聞』1930.12.5. 夕刊 1 面)。恐らくこのことだと思われるが, 詳細は不明である。

- 14) 「壁」は, ロシアの作家アネヴェーロフによって赤衛軍の素人劇のために書かれたものとされているが詳細は不明である(『關西学院新聞』59. 1930.12.20. 4 面)。
- 15) これについては, 『澁澤榮一傳記資料』にも関連資料が取められている。
- 16) これは後に「伝統的なキリスト教型で『人格の交流』を主とし, その方向に賀川豊彦の指導する社会連帯的社会改良型セツルメントで, 生活協同組合方式を取ったものと, 興望館型のようにケースワーク, マスワーク, コミュニティ・ワーク等社会事業を主としたものがあった」と整理されている(吉田, 1990: 89)。
- 17) サンフランシスコのカリフォルニア街 612 番地にあったホテルと思われる(瀧本・プレスト, 1928: 67)。
- 18) 1958 (昭和 33) 年の改正で, 隣保事業が第 2 種社会福祉事業とされた。

参考文献

- 「カール・秋谷一郎」は, 「秋谷一郎」として扱った。秋谷一郎 (1955) 「サム, ちょうという男」『NY 文藝』創刊号, 4-47。
- カール・秋谷一郎 (1986) 「神戸からユタ州トバズまでの道—OSS 部員だった婦米二世の手記」『季刊汎』3, 120-165。
- 秋谷一郎 (1988) 「原田の森における私の学生時代」『関西学院学院史資料室 資料室便り』6, 10-13。
- カール・秋谷一郎 (1996) 『自由への道太平洋を超えて [ある婦米二世の自伝]』行路社。
- 麻田貞雄 (1993) 『両大戦間の日米関係—海軍と政策決定過程』東京大学出版会。
- 土肥昭夫 (1980) 『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社。
- 海老沢亮 (1959) 『日本キリスト教百年史』日本基督教団出版部。
- 遠藤興一 (2004) 『田川大吉郎とその時代』新教出版社。
- 藤田治彦 (2004) 「セツルメント運動と日本」デザイン史フォーラム編『アーツ・アンド・クラフツと日本』思文閣出版, 195-202。
- 福島正夫・石田哲一・清水誠 (1984) 『回想の東京帝大セツルメント』日本評論社。
- 一番ヶ瀬康子 (1964) 「日本セツルメント史素描」『日

- 本女子大学紀要・文学部』13, 27-51 (1971, 「Ⅲ-1
「日本セツルメント史素描」『現代社会福祉論』時
潮社, 161-210).
- 井田昭子 (1990) 「中島重と関西学院: SCM と社会的
キリスト教運動をめぐって」『キリスト教主義教
育: キリスト教主義教育研究室年報』18, 25-42.
- 井上琢智 (2001) 「[シリーズ・関西学院の人びと] 2.
内村順也」『関西学院史紀要』7, 212-219.
- 上智大学編 (1963) 『上智大学五十年史』上智大学出版
部.
- 神田建次 (1992) 「暁明館の成立と変遷—関西学院社
会奉仕会の足跡を求めて」『関西学院史紀要』2,
63-88.
- 関西学院史編纂委員会 (1929) 『開校四十年記念關西
學院史』関西学院.
- 関西学院百年史編纂事業委員会編 (1997) 『関西学院
百年史 通史編 I』関西学院.
- 神崎驥一 (1927) 「米國々民性管見」『外交時報』539,
36-46.
- 菊池正治 (1993) 「昭和恐慌期の社会事業: 社会事業の
『行詰まり』とセツルメント」『九州龍谷短期大学
紀要』39, 303-331.
- 小林彌太郎 (1958) 「二つのこと」吉岡美清編『父の
俵』私家版, 4-5.
- 倉橋克人 (2010) 「日本における『社会的キリスト教の
胎動』—中島重と賀川豊彦の出会いをめぐって」
『キリスト教社会問題研究』59, 1-48.
- 久山康編 (1956) 『近代日本とキリスト教—大正・昭和
篇』基督教学徒兄弟団.
- 九州大学創立五十周年記念会編 (1967) 『九州大学五
十年史 通史』九州大学創立五十周年記念会.
- 松村禎彦 (1941) 『最近に於ける左翼學生運動 (主として
學生グループ關係)』(思想研究資料特輯第 85
号) 司法省刑事局 (復刻版, 東洋文化社, 1972).
- 明治学院編 (1977) 『明治学院百年史』明治学院.
- 室田保夫 (1989) 「高橋元一郎ノート—詩, 社会事業,
平和, そして祈り」『同志社談叢』9, 119-231 (1994,
「高橋元一郎の生涯と思想—詩, 社会事業, 平和,
そして祈り」『キリスト教社会福祉思想史の研究
—「一国の良心」に生きた人々』不二出版, 423-
511).
- (2012) 「第 2 章 関西学院における福祉の
系譜—戦前を中心にした素描」芝野松次郎・小西
加保留編著『社会福祉学への展望』相川書房, 19-
35.
- 永岡正己 (1984) 「川上貫一と大林宗嗣」『日本福祉大
学研究紀要』58, 243-296.
- (1986) 「I 戦前の社会事業」右田紀久恵・高
田真治編『地域福祉講座①—社会福祉の新しい
道』中央法規出版, 2-23.
- (1993) 「大阪における地域福祉の源流—一
方面委員とセツルメントを中心に」日本地域福祉学
会地域福祉史研究会編『地域福祉史序説—地域福
祉の形成と展開』中央法規出版, 186-230.
- 中原賢次 (1962) 『基督者学生運動史—昭和初期の
SCM の闘い』日本 YMCA 同盟出版部.
- 中見真理 (2004) 「ギルド社会主義と日本—柳宗悦に
よる受容を中心として」デザイン史フォーラム編
『アーツ・アンド・クラフツと日本』思文閣出版,
203-213.
- 奈良常五郎 (1959) 『日本 YMCA 史』日本 YMCA 同
盟出版部.
- 小笠原慶彰 (2010) 「大阪暁明館と關西學院社會奉仕
會—掃米二世・カール秋谷一郎の思想と行動に関
する—考察」『社会事業史学会第 12 (通算 38) 回
大会報告要旨集』61-62.
- 佐藤貴洋 (2009) 「横浜で展開した関東学院のセツル
メント活動—日本の社会事業活動の一形態」小林
照夫・澤喜司郎・帆苅毅編『港都横浜の文化論』
関東学院大学出版会, 165-178.
- 渋沢青淵記念財団竜門社編 (1960) 『澁澤榮一傳記資
料』33, 渋沢榮一伝記資料刊行会.
- 重田新一 (1984) 「解題」谷川貞夫『社会福祉序説—戦
前, 戦中, 戦後の軌跡』全国社会福祉協議会,
701-741.
- 新堀邦司 (1994) 『愛わがプレリユード—カナダ人宣
教師 G. E. バットの生涯』日本キリスト教団出版
局.
- 塩入隆 (2006) 「日本メソジスト教会社会事業史の試
み」『ウェスレー・メソジスト研究』6, 21-47.
- Smith, Henry D (1972) *Japan's First Student Radicals*,
Harvard University Press. (松尾尊兎・森史子訳
(1978) 『新人会の研究—日本学生運動の源流』東
京大学出版会).
- 高尾利数編著 (1969) 『キリスト教主義大学の死と再
生』(今日のキリスト教双書 3) 新教出版社.
- 高島進 (1957) 「戦前における学生セツルメントの性
格について—東京帝大セツルメントを中心に」
『(日本福祉大学) 研究紀要』1, 16-29 (1970, 「第
4 部 I 戦前における学生セツルメントの性格に
ついて—東京帝大セツルメントを中心に」『社会
保障と社会福祉』汐文社, 322-347).
- 武邦保 (1977) 「『学生キリスト教運動 (S・C・M)』の
思想と行動」『キリスト教社会問題研究』26, 40-70.

- (1989) 「雑誌『社会的基督教』の一研究— (1932-41年, 月刊・発行人・中島重)」『キリスト教社会問題研究』37, 243-258.
- 竹内愛二 (1952) 「我国セツルメント事業の諸問題」『(関西学院大学) 人文論究』2(5), 37-54.
- 瀧本二郎・マダム・ド・プレスト (1928) 『欧米漫遊留學案内—米國の部』欧米旅行案内社.
- 谷川貞夫 (1951) 「二十年間暁明館アドバイザーとして」『二十周年記念暁明館の歩み』大阪暁明館, 30-34.
- 都田豊三郎 (1951) 「1930-33年 SCM 運動の當時を顧みて」『開拓者』47(5), 31-36.
- 富田富士雄 (1976) 「渡部一高先生の人・学問・思想」『(関東学院大学文学部) 紀要』21, 1-8.
- 遠山隆 (1995) 『80年永き福祉の歩み 大阪暁明館物語』大阪暁明館.
- 梅木真寿郎 (2008) 「大林宗嗣のセツルメント思想: 時代精神と英国社会思想からの形成」『評論・社会科学』86, 27-65.
- 和田洋一 (1961) 「内村鑑三, その弟妹, そして私」『キリスト教社会問題研究』5, 21-26.
- Wilson, Robert A. & Hosokawa, William K. (1980) *East to America; A History of the Japanese in the United State*, William Morrow and Company (猿谷要監訳 (1982) 『ジャパニーズ・アメリカン—日系米人苦難の歴史』有斐閣.)
- 柳生直行編 (1984) 『関東学院百年史』関東学院.
- 山本岩夫 (1998) 「アメリカ東海岸唯一の文芸誌『NY文藝』」『日系アメリカ文学雑誌集成⑬ NY文藝第1巻』不二出版, 1-22.
- 吉田久一 (1984) 「大正期のセツルメント」マハヤナ学園六十五年史編集委員会編『社会福祉法人マハヤナ学園六十五年史 通史編』マハヤナ学園, 10-14.
- (1990) 『改訂増補版 現代社会事業史研究』(吉田久一著作集3), 川島書店.
- 無署名 (2012a) 「聖アロイジオ塾」『WEBで知る“SOPHIA”』19, 1-2.
- (2012b) 「上智カトリック・セツルメント」『WEBで知る“SOPHIA”』30, 1-2.

[追記]

本稿は、2010年(平成22)年5月8日・9日に関西学院大学で開催された「社会事業史学会第38回大会」の第4分科会における口頭発表「大阪暁明館と關西學院社會奉仕會—帰米二世・カール秋谷一郎の思想と行動に関する一考察」を基にしたものである。また2010(平成22)年度京都光華女子大学特別研究費による研究「大阪暁明館と關西學院社會奉仕會」の成果である。

Osaka Gyomeikan and Kwansei Gakuin Student Services Organization : Focusing on the role of Karl Akiya Ichiroh

Yoshiaki Ogasawara

Faculty of Career Development, Kyoto Koka Women's University

Osaka Gyomeikan was a social work facility established by a philanthropist in Osaka, Japan at the beginning of the Taisho period, and it still exists as a major hospital in the region. The management of this facility was transferred to the Kwansei Gakuin Student Services Organization as a settlement at the beginning of the Showa period. The Kwansei Gakuin Student Services Organization was established by Karl Akiya Ichiroh, a 'Kibei Nisei' (a Japanese-American who was born in America, educated in Japan and returned to America) studying at Kwansei Gakuin at the time. However, Akiya returned to America just before the Student Services Organization acquired management of Gyomeikan. He relinquished his Japanese nationality and dropped out of college to become an American citizen during the war and post-war period. At the beginning of the Showa period, there was an intensification of the University Settlement Movement, Student Christian Movement and Social Christian Movement. The students involved in these movements were labelled left-wing students. Akiya was not actively involved in these movements, although he did adopt the stance of Christian Socialism. School authorities addressed these movements using methods that differed from Akiya's. These differences were probably partially responsible for Akiya renouncing his Japanese nationality and returning to America.

Key words : Osaka Gyomeikan, Kwansei Gakuin Student Services Organization, Karl Akiya Ichiroh, settlement, Kibei Nisei